

若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム（ITP）

『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

平成 23 年度派遣報告書

——派遣国：インド，機関：発展社会研究所，語学名：ミゾ語，派遣期間（H23. 8. 17-
H23. 11. 12）——

平成 23 年入学

大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

博士課程 1 回生

吉沢加奈子

自身の研究テーマについて

報告者の研究地域はインド北東部のミゾラム州である。同州はインドの「辺境」とされる地域に位置しているにも関わらず、人間開発指数は国内平均を上回り、識字率はインド第 2 位である。ミゾラム州は 20 年にわたる分離独立運動を経て 1987 年にインドの一州となった。このような歴史から、ミゾラム州の政治史に関する研究は、地域政党の発展の過程と中央政府との関係を主軸として論じられてきた。一方、社会史に関する研究においては、植民地統治とキリスト教伝道団の影響が重視されている。報告者は地域の人々の活動に着目して、近現代ミゾラムにおける社会変容の歴史を描きたいと考えている。研究対象は、ミゾラム州における青年団 Young Mizo Association である。この青年団は現在州人口の約 3 割をメンバーとし、同州の社会福祉、政治、宗教に関わる多様な活動を行っている。

青年団は設立後まもなく州内の各地に広まり 青年団はミゾラムの地域政党や分離独立運動の指導者と密接な関係を保ちながら社会の相互扶助的活動に従事していた。1940 年代から 1960 年代の政治変容の裏で、彼らがいかにして人々に民族統合のビジョンを提示し、活動規模を拡大させていったのかを明らかにすることによって、この地域の社会変容と独自の発展経路を明らかできるのではないかと考えている。



写真1 ミゾラム州アイゾウル市の風景



写真2 葬式の後で棺を運ぶ青年団

研修言語の概要

研修言語のミゾ語はチベット・ビルマ語族の一つである。主にミゾラム州と同州に隣接する地域で話される。同州では英語と並び公用語とされる。元来、文字を持たない言語であったが 19 世紀末にミゾラムを訪れたキリスト教宣教師 J. H. Lorrain が英字アルファベットを用いミゾ語の発音を体系化した。ミゾラム社会におけるキリスト教の影響は絶大であり、ミゾ語の正しい用法を調べる際は聖書が使われることもある。

語学研修の内容について

研修前半の1ヶ月間はデリーにて、学校教師をしているミゾラム州出身の方から基礎的な文法と会話を学習しつつ、授業の合間にミゾラムの伝統文化や歴史、現代の政治などについて話を伺った。ミゾ語の学習教材が出回っておらず、ミゾ語で書かれた中学生向けの英語の教科書を使って用法を覚えていった。教科書の内容がだいたい終わると、私の研究に役立つような例文や必須単語を先生が書き出して教えてくださった。習った例文と単語は全部ボイスレコーダーに録音して、毎日復習した。後半2ヶ月はミゾラム州にてホームステイをしながら、ステイ先の元大学講師の女性から1日1~2時間程度、週4~5日のペースで実践的な会話を中心に教えていただいた。ミゾラム州の先生は歳が近いこともあり滞在の日を追うごとに親交が深まった。同州滞在期間の後半には、一緒に市場や教会へ外出する機会が多くなった。こうした経験の中で、実践的な会話と同時にミゾラム社会における人との関わり方を身につけることができたのではないかと考えている。近所の人々との交流も語学の学習にとって大切な要素であった。滞在先の2軒隣の雑貨屋を営む家族と親しくなり、敬虔なキリスト教徒である彼らからミゾ語の聖歌をいくつか教えてもらった。雑貨屋の店先で聖歌を一緒に歌ったりお客さ

んとミゾ語で会話をするのは非常に楽しく、かつ有意義なミゾ語実践の場であった。



写真3 デリーでの授業風景



写真4 Tetei先生とアイゾウルにて

期間中に印象に残った体験や経験

ミゾラム州に来てすぐの移動中、道路が土砂崩れで塞がれており、一晩じゅう人気のない山道で立ち往生する事になってしまった。翌朝になっても土砂は撤去されていない。携帯電話の電波もなく、どうしたものかと思っていたが、友人の遠い知り合いが助けにきてくれ、彼の家で食事と休養をとらせてもらった。後から聞いたところ友人とその家族は夜じゅうずっと親戚や知り合いに連絡し、土砂崩れの場所を突き止めて、現場に近い知り合いに私の救助を頼んだという。ミゾラムの人的ネットワークの緊密さを実感する出来事であったが、助けに来てくれた男性に片言のお礼しか言えずもどかしかった。次に同じ道を通る時は、流暢なミゾ語で感謝を伝えに行きたいと思っている。

目標の達成度や反省点について

日常会話は実践の場が多くあったためほぼゼロからの学習にしては上達できたと思う。日常会話のコミュニケーションにより今後の調査において重要な基盤となりうる人間関係を構築できたことは大きな収穫であった。しかし、聞き取り調査になると語彙のなさや聞き取り能力の不足が感じられた。今回の調査では主に州都に住む英語教育を受けた若い人達から話を聞く機会が多かったため、ミゾ語が聞き取れなくても英語でフォローできた。しかし今後は年輩者や地方の人々と関わる必要が出てくる。幅広く語彙を増やす事と聞き取り能力の向上が当面の課題である。

外国人が言語を学ぶための体制が整っているとは言えない環境の中，それでも皆暖かく迎え入れてくださり，彼らの様々な親切にいつも頭がさがる思いであった。そして，このような貴重な機会を与えてくださった日本学術振興会，ITP事務局と先生方にこの場を借りて厚く御礼申し上げたい。